

悲の海は深く

高史明

Shimura Hisaaki



東本願寺

悲の海は深く 目次

はじめに

第一章 人知の闇

- 一 佐世保の海 2
- 二 報恩のころ 7
- 三 助けてくださいでは、助からない 17
- 四 「私」の根っこに潜むもの 25
- 五 弥陀をたのむころ 31

第二章 親鸞聖人の信心

- 一 「末法五濁」の世界 42
- 二 生を忘れた私たち 51

- 三 飯茶碗一杯に何粒の米があるか 59
- 四 眞実の信心 64
- 五 言葉の知恵の根っこ 78

第二章 阿弥陀の大地

89

- 一 『教行信証』を開く 90
- 二 阿闍世の救い 100
- 三 法のはたらき 104
- 四 『歎異抄』との出会い 110
- 五 心と身、まるごとの往生 132
- 六 世のなか安穩なれ 143

あとがき

大いなる悲涙よ

黒闇罪業海に満ち渡れ

はじめに

現代世界は、新しい奈落に落ちようとしているのであろうか。人々の顔の裏側に妙に虚ろな気配が漂い始めている。テレビの画面に踊る歓声にも、いつもの活気が感じられない。希望・絶望、不安・懷疑、呻き声が、地殻の暗部に広がり始めている気配が濃厚だ。この国の繁栄のすぐ裏側では、年間三万人を超える人が自ら命を絶っているのであった。毎日百人もの人が、自死して世を去るとは何事であらう。その一方、一夜にして巨万の富を手にする者がでている現実がある。

第二次世界大戦の地獄が思い返される。その戦争のとき、最後の一年間だけで日本の戦死者はいつきに二百万人になったという。日本の各地は焦土と化し、海辺には海の犠牲者の死体が漂った。その戦争が日本の敗戦と決まったとき、人々の薄汚れ乾ききった顔には、ふっと空ろな薄笑いが浮かんでいた。米兵がその人々の脇を闊歩した。その六十年前、この国の誰が、今日の「繁栄」を予感し得たであらう。いまや日本

の何処に行っても、もはやどす黒い焦土の爪跡は見らない。かつての黒焦げの町には、繁栄の印の超高層ビルが林立しているのだ。その綺麗な街路を行く人々の顔にも、かつての乾きはない。薄汚れもない。にもかかわらず、今日の繁栄には潤いがなく、人々のにこやかな表情の裏には無機質な砂漠の気配が漂い始めているのである。繁栄の街路の真下には、いまなお夥しい数の犠牲者の慟哭が音もなく広がっているのではないか。

劫濁のときうつるには

有情ようやく身小なり

五濁悪邪まさるゆえ

毒蛇悪龍のごとくなり

無明煩惱しげくして

塵数のごとく遍満す

愛憎違順することば

高峯岳山にことならず

有情の邪見熾盛にて

叢林棘刺のごとくなり

念仏の信者を疑謗して

破壊曠毒さかりなり

「正像末和讃」親鸞

「劫濁」とは、時代の根源的濁りを真つ直ぐに指す言葉である。現代はまさに深く濁っていると言うほかない。数量化された巨万の富の真裏には、数知れない人々の骨と肉の飢えと苦悩が張り付いているのである。また「無明」とは、人間知に潜む根源的闇を意味しているのであった。単純な比喻で言うなら、人間とは自分の顔が、自分の目では見えないのである。人間は自分の顔を見るとき、鏡を見る。しかし、鏡に映っている顔は、決してあるがままの当人の顔ではない。その顔は右と左が転倒しているのである。にもかかわらず、人間はその転倒している顔を自分の顔だと思い込むのである。何という転倒であろう。もちろん、科学の時代の今日では、物理学がこの転倒のからくりを見事に説明している。しかし、その説明は、なお無明の陰を引きずつ

ていると言えまいか。あるがままの顔と鏡の中の顔の関係は、確かに物理学的に説明が可能である。私自身は、とてもそんな難しい説明はできないが、その説明を聞いたことがあった。しかし、その説明を聞いても、なおあるがままの顔が、あるがままに説かれているとは思えなかった。その説明の裏側には、数学的理性がびつたりと張り付いているのである。

人間の知恵とは何であろう。仏教では、人間の感性的レベルの知恵の形を「小悲」と呼び、また概念的に対象把握をしてゆく理性的知恵の形を「中悲」と名づけていた。現代世界の大人は、いわば「中悲」の知恵に生きて、鏡の中の顔と自分の目の関係を物理学的に説いて満足しているのである。それどころか、その知恵のレベルで子どもたちを見下ろして、「教育」しようとしていると言っている。しかし、その知恵は、子どもたちにあつては、なお両足で立っている大地に、頭を下にして逆立ちで立つことに等しいのではあるまいか。人間の理性の根っこをなすのは、人間が人工的に造った記号にはかならない。あるがままの顔と鏡の中の顔の間には、物理学的説明がいかに正確にできたとしても、なお鋭い断絶があると言っているいいのである。あるがままが、

あるがままに見えるには、「小悲」「中悲」の知恵を超えて、「大悲」に拠る以外にないのである。親鸞聖人は「大悲無倦」と開かれていた。

思えば、第二次世界大戦の惨事は、まさに「中悲」に自足している人間の無明ともにあつたと言つていいのではないか。人間の近代文明は、決して「大悲」による世界ではなかつた。人間は記号を發明して文明への第一歩を踏み出すとともに、現代に至つてその対象的にはたらく数学的理性を駆使して原子の世界を解明した。その「内観」の智慧はまた、「記号」の闇を潜めていたのである。この「頂天」から何が生まれたか。あの戦争の末期には原子爆弾が爆発したのであつた。あの熱核兵器こそは、まさしく人間の対象的に働く数学的理性の産物にはかならないのである。人間の知恵には、原子爆弾を生み、生み出すだけでなく、その業火を同じ人間の頭上で爆発させる闇を潜めているのである。

第二次世界大戦は、まさしく人間の「無明」の深さをまざまざと物語つていたと言つていい。原子爆弾は、人間の知恵の無明の象徴である。その爆弾が爆発するときには、兵士と民間人、女子と子どもの違いは完全に無視される。その業火は万物を焼き殺してゆくのである。第二次世界大戦は、まさに絶対戦争であつた。にもかかわらず、その戦争の後の後にも、アジアにおいては朝鮮戦争があり、ベトナム戦争があつた。現代の繁栄の地殻には、いまなおどす黒いマグマが渦巻いているのである。にもかかわらず、現代人はいよいよ深く仏の声に背こうとしている。

しかし、仏の智慧に背を向けた繁栄は、真実の生をいよいよ深く濁らせていくほかないのだ。それが今日までの歴史の示すところであろう。現代の繁栄は夥しい死者を生んでいくばかりではなく、勝利者の満足気な顔の裏側にいよいよ深い空洞を広げているのだ。その一方で、いまや二酸化炭素という名の化石燃料の「怨霊」によって、日々に重く地球全体を押し包みつつあると言ふほかない。しかも、この「怨霊」は、やがて海にも溶け込み、珊瑚や甲殻類などの生き物を死滅させるに違いないと警告されてきた。今日の文明の根っこには、海や大気を死なせて闇が潜んでいるのである。

思えば、日本の近代化の始まりのとき、廃仏毀釈の狼煙（うしほ）が上がつてきた。第二次世界大戦の惨事は、それからわずか七十七年後のことである。いまさらにまた仏の声が無視されてゆくなら、ふたたびこの国には廃仏毀釈の狼煙（うしほ）が上がるのではないか。そ

のとき今日の繁栄を支えている化石燃料の争奪を巡る争いは、世界に何を生むことになるであろう。しかもその燃料の枯渇は、今後の三十年から五十年ではないかと予測されている。

「自然じねんはすなわちこれ弥陀の国なり」とは、親鸞聖人のお言葉であった。人間と自然の真の関係を心から願わざるを得ない。人間とは、自らの知恵の闇を仏に教えられたときにのみ、人間と自然の真の関係を生きることができるのである。それがまた、ひいては人間と人間の世界に真に平和な関係を生むのだ。「世のなか安穩なれ」と心から願える大地は何処にあるのか。近代文明が生んだ数知れない犠牲者は、いま私たちを深い沈黙の眼差しで見つめているのである。私たちは、手遅れにならない前に真の「自然」に合掌できる道を踏み出したい。その願いがここに少しでも明らかにできているかどうか。皆様と願いをともにしたいと念じている。

合掌

二〇〇五年十一月一日

高 史 明

一 佐世保の海

真宗大谷派佐世保別院の報恩講ほうおんこうにご縁を頂戴することになりました。高史明です。初めてご縁を頂戴いたします。

先ほど、このお御堂みでうに坐らせていただき、皆さまのお念仏の声をお聞かせいただきました。ご縁であります、私の心身の深いところからも、新たにお念仏が響きあがってくるようでした。死んだ子を思い出し、父親を思い出しました、また早くに亡くなったので顔すらも知らない母親ですが、その母親までが近くに感じられました。有り難うございます。

『教行信証』の冒頭において親鸞聖人は明示めいじなさっていました。

これすなわち権化ごんけの仁にん、斉ひとしく苦悩くなんの群萌ぐんもうを救済くきうさいし、世雄せおの悲、正ましく逆誘ぎやくま闡せん提だいを恵おほまんと欲ほす。

(真宗聖典一四九頁)

皆さまもまた、きつとそれぞれの胸底の仏さまを新たに思い直し、あるいはその意識もなく無心にさまざまな仏縁を思われていたのではないのでしょうか。皆さまのお念仏の声は深く、皆さまのお声でありながら、それはまた仏さまの真実のお声であります。

しかも、そのお念仏はまた、海のほうからもこのお御堂に渡ってこられていたのではないでしょうか。ご当地の佐世保の海の向こうは、古来より深い縁のある朝鮮半島や中国であります。この海を渡られた仏さまもまた、お念仏を称えられていたのではないのでしょうか。そこには喜びのお念仏があり、また悲しみのお念仏があつたに違いないと思います。

その悲しみということで考えますと、第二次世界大戦では、とりわけこの海には計り知れない悲しみの涙が流されたのでした。私は先の第二次世界大戦の末期、関門海峡の下関というところで大きくなったのですが、皆さまのお念仏の声を聞きながら、戦争の末期、まるで海の墓場のようであつた海峡の光景が、まがた 瞼の裏に浮かぶのを覚

えないではおれませんでした。あの狭い海峡では実に多くの汽船が触雷し、高い水飛沫を上げて沈没したのであります。海は無心であります。しかし、その海面に沈没船のマストがニヨキニヨキと突き出るようになっていたのであります。そのマストに波がひたひたと戯れていた。その下では、いったい何人の人が亡くなったのでありますしよう。

戦争の末期には、無慚な沖繩戦の地獄へと派遣される輸送船団が、その海峡に通じるこの佐世保の沖の海を通つたのではないのでしょうか。沖繩戦といえますと、日本では戦艦大和の最期が大変に有名ですが、その陰には無数の小船の犠牲もあつたことが、ここに思い起こされます。小さな漁船が、それこそ五隻、十隻と列を作つて沖繩に動員されたのであります。途中の海には潜水艦が待ち構えていた。船団のうちの何隻かは、はじめから魚雷の餌食になるのが計算済みだつたと聞いています。それでも何隻かは、沖繩に到着するであらうということから、派遣されていた船団。船団というようり、徴用された小さな漁船と、その船の無名の漁師さんたちの葬列であります。

私のいのちの恩人が、徴用されてその漁船の乗組員になっていました。幼かつた私

が、関門海峡の海で溺れ、土船の底に吸い寄せられていたとき、潜つてきて助けてくれた青年であります。いまでも妙に明るい海面を揺らして手が伸びてきて、ぐいと首筋を抑えてくれた感覚をはつきりと思ひ出すことができます。同じ朝鮮人長屋の青年でした。その青年も、佐世保の沖の海を通つたに違いないのであります。そして、ついに帰つてこなかつた。その青年の声のないお念仏もまた、このお御堂に響いていたことでありましょう。このお御堂には、いま無数の仏さまの声のない声が満ちているのであります。

第二次世界大戦は、まことに無慚な戦争でございました。人間の歴史の二十世紀、その百年間には二度までも世界大戦が繰り返されたのであります。しかも、その後もアジアでは朝鮮戦争とベトナム戦争の火炎が吹き上がりました。人間中心の近代とは、眩しいばかりの繁栄の時代でしたが、その裏側では、人間の黒闇が地殻を突き破つて噴出した世紀だつた。その地獄に立たれた数知れない仏さまのお声が、たつたいまこのお御堂に響き渡つたのであります。戦争で無残に散つていった仏さまたち、長崎の仏さま、沖繩の人たち、朝鮮や中国の人たち、「万歳」と叫び、あるいは無念の涙を

呑んだ日本の人たち、そこにはまた、アメリカ人、イギリス人、東南アジアの人々、オランダ人など、世界の人々の声なき声も一つになっていたに違いないと思います。私たちはいま、その無数の仏さまのお念仏に導かれて、今日の報恩講のご縁を迎えようとしているのであります。

思えば、浄土真宗は鎌倉期の日本に誕生した教えであり、日本に伝統されてきたものですが、その仏さまの真実は人間の黒闇を深く抉ることを通して、世界中の仏さまの真実の智慧を明らかにしているのです。それとも「無数の仏さま」という言い方は、私の独断でありましょうか。いやいや今日は、浄土真宗、親鸞聖人の教えをいただく大事な報恩講の場であります。日本の皆さんにとっては、日本人の親鸞聖人の教えに対する報恩の思いということが、共通しているのではないかとも思われますが、お念仏の真実は、いまを生きて世界を見つめておられる阿弥陀の真実であります。ここにまず、その真実の前に集われた皆さまとともに「報恩講」の根本を見つめてみたいと思います。

二 報恩のこころ

ご当地に参りまして、先ほどのたびの報恩講ごんしんぎょう厳修ごんしんしゅうについての開催趣旨のお言葉を拝見しました。そこに「報恩講のこころとは何であるか」ということが明示されていた。深く教えられるお言葉でした。「わが宗門は報恩講教団であり、報恩の要としての生活が同朋を生み出し、同朋の交わりを深めんとする姿を回復すべきである」と述べてありました。「わが宗門は報恩講教団である」と述べられている。私はこのお言葉を目にしたとき、ほとんど反射的に室町期の蓮如上人が、親鸞聖人の教えを世間に向けて発信された第一声の言葉を思い起こしたものでした。皆さんは「報恩講教団」という言葉で何をお考えでありましょう。皆さんはすでによくご承知のお言葉でしようけれども、私にとってここにこの「報恩」という言葉を与えられたことは、まさしく改めて今日のご縁を感じ直すきっかけとなっています。

蓮如上人は「お念仏」の真実をこの「報恩感謝」という言葉と一つに結んで、人々の生きる「いちの」の大地となさったのでした。それが蓮如の第一声であります。とはいえ、それから今日までには、すでに五百年以上の時が経過しています。この間に「報恩感謝」、そして「念仏」という教えについてさえ、その理解と実践のあり方に大きな変化や歪みもまた起きているのではないでしょうか。

例えば、『歎異抄』の十八章には次の言葉があります。

仏法のかたに、施入物の多少にしたがいて、大小仏になるべしということ。この条、不可説なり、不可説なり。

(真宗聖典六三三頁)

お布施の大小によって、仏さまの扱いまでが変わってしまうということ。これがしかし、現代の生者と仏さまのありのままのかかわり方の一面となっていることはないか。葬儀場の扱いから、戒名、法名のあり方までが違ってきている。そこでは仏さまに上下の位まで設けられています。しかも、日本を代表する政治家などには、日本では死んだらみんな仏となるので、上下の違いはありませんと言って開き直る人すら

いる始末であります。「報恩感謝」のところが、現代では完全に転倒しています。いま一步突っ込んで言いますなら、生者が自分中心に仏さまを利用しているのであります。いまだに「穢れ」の思想から抜けきれずに、葬儀の参列者に清めの塩とやらが配られてもいるのであります。

その裏側には、「報恩感謝」の教えが、まるで死に方教育に類する教義ともなって、死ぬことは怖くはないと強調されたり、その一方ではまた何事も我慢、我慢という言葉の方でもって、慢心の悟りともされている傾向もありません。「念仏」のところが、完全に見失われ、現実生きる力となっていないのであります。この現実から、戦後は蓮如上人への世間からの厳しい批判も起きています。しかし、蓮如上人の第一声は、歴史を超えて響く真実であります。今日のご縁にあたり、まずその第一歩を深く考えてみたいと思います。

蓮如上人が親鸞聖人のお言葉を、人々に向かってそれこそ非常に深いお心でもって、発信なさったのは一四六一(寛正二)年の三月のことでした。私が見てきた記録では、その日付が一番古い。ところで、その第一声が発信された室町期の一四六一年、人々

はいかなる状況を生きていたでありましょう。その年、京都では八万二千人からの餓死者が出たとの記録があります。たった二月間に起こった八万二千人の餓死。まことに恐ろしい犠牲であります。昨今の中越の地震や相次ぐ台風の犠牲、またイラク戦争での毎日のように起きている犠牲者を通してその犠牲を考えますと、今日の私たちにその恐ろしい地獄がいくらかは想像されるのではないのでしょうか。

いや、私たちは、すでに第二次世界大戦や朝鮮戦争、ベトナム戦争の悲惨な犠牲を知っているものであり、今日ではイラク戦争が日々に人々のいのちを奪っており、しかも、この戦争には、戦後はじめて日本の自衛隊も派遣されています。第二次世界大戦の教訓は何処に見失われたのでありましょう。思えば、お隣の長崎に、あるいはその少し前には広島に原子爆弾の投下があったのでした。あるいは沖縄戦では、二十万人を超える犠牲者が出ている。また、東京大空襲に象徴されるように日本の各都市が、いわゆる焦土となってゆく空襲がありました。日本の敗戦の年の三月、B29の大編隊が飛来してきまして、人口密集地の江東区を火炎の帯で取り囲み、その真中に焼夷弾しょういだんを集中的に投下したのでした。逃げ道を失った人々は、いわば焼き殺された

とも言えましょう。この東京大空襲のときには、一夜にして十万人が亡くなったのであります。

蓮如上人の時代の地獄も、同じ黒闇こくあんだったに違いありません。一月と二月の二月間に八万二千人からの餓死者が出たと言うのですから。まことに恐ろしい地獄の出現であります。鴨川がその死者の遺体で埋まってしまう、流れが止まったとも言われています。蓮如上人の第一声は、その三月だったのでした。恐ろしい地獄と向かい合ったとき、上人は目の前に広がる地獄のような京都の光景を見つめて、声を上げずにはおられなかったのでありましょう。

皆さんもきつと同じ情況に置かれたら、居たたまれない思いを抱かれるはずであります。今度の新潟県中越大地震のときにも、ニュースを見るたびに胸を締め付けられたのではないのでしょうか。そうであればその逆に母子三人のうち、幼い子が一人だけでも助かったというニュースが報じられたときには、本当にうれしい感じを抱いたものと思います。これこそは地獄を前にしたとき、世界中の人間が同じように感じる感情であります。

ところで、蓮如上人は京都中に餓死者の葬列とお念仏の声が満ち満ちる状況を前にしたとき、いったいいかなる言葉を発信なさったのでありましょう。思えばその第一声に、報恩講教団といわれている浄土真宗の教団の大地が、極めて深く鋭く開示されていたのであります。それこそはまた、真宗宗門の大地であるとともに、現代の黒闇をも開く大地であるとも言える根源的なメッセージであります。今日の報恩講の初めに、まずはその蓮如上人の第一声の要をいただいてみたいと思います。歴史書はそのときの京都の飢餓状況を、次のように記録していました。「大極（東福寺の禅僧）が四条橋より上流を眺めると死屍累々として鴨川をふさぎ、腐臭が鼻をついた」と。蓮如上人は、その地獄に喘ぐ人々に訴えたのであります。

当流上人ノ御勸化ノ信心ごかんげしんじんノ一途ハ、ツミノ軽重ヲイワズ、マタ妄念妄執もうねんもうしつノココロノヤマヌナンドイウ機ノアツカイヲサシオキテ、タダ在家止住ノヤカラハ、一向ニモロモロモノ雑行ざつぎやうぎやう雑修ノワロキ執心をステテ、弥陀如来ノ悲願ひがんニ帰シ、一心ニウタガイナクタノムココロノ一念オコルトキ、スミヤカニ弥陀如来光明みだにらうこうみょうヲハナチテ、ソノヒトヲ撰取せんしゆシタマウナリ。コレスナワチ、仏ノカタヨリタスケマシ

マスココロナリ。

そして、次に大事なお言葉を開示してしました。

サレバコノウエニハ、タトイ名号みやうごうヲトナウルトモ、仏タスケタマエトハオモウベカラズ。

皆さんは、このお言葉に何をお感じになられますか。本当に驚くべきお言葉です。少なくとも私にとりましては、深く心底に衝撃しやうげきを覚えるほかなかったお言葉であります。私は子どもに死なれて、気がついてみるとお念仏を称えていたのでした。「愛別離苦あいべつりく」という言葉があります。蓮如上人は、それこそがいわゆる人間の四苦八苦のなかでも、もつとも耐え難い悲しみ苦しみであると説かれていましたが、私はまさにその「愛別離苦」に痛撃つうげきされて、その意識もなく助けてくださいの叫びをあげたのでした。何年も何年も、亡き子に手を引かれるようにして称えました。しかし、ある日、突然気づいたので。気づいてみますと、蓮如上人は言われていたのであります。

「タトイ名号ヲトナウルトモ、仏タスケタマエトハオモウベカラズ」と。胸を突かれました。同時にお念仏とは何であるのか、と無意識に思いました。なぜ蓮如上人は、